

# べっふの文化財

No. 41

平成23年3月

## —別府市の近代化遺産—



別府市教育委員会  
別府市文化財調査員

## 目 次

1	聴潮閣主屋	1
	洋館	2
2	富士屋旅館主屋	3
	前門	4
	石段	4
	石垣	4
3	糸永家住宅主屋	5
	離れ	6
4	別府タワー	7
5	松下金物店	9
6	ラクテンチ（ケーブルカーの道床）	10
	その他	
	◎実相寺竪穴住居復元家屋	12
	◎別府市実相寺遺跡報告（写）	14
	◎別府市北石垣春木遺跡発見に就いて	16

## 1. 聴潮閣主屋・洋館

青山町9 泉孫合資会社所有

国登録有形文化財（建造物）

平成13年8月28日登録

### 【主屋】

登録対象延べ面積：259.55㎡

聴潮閣は高橋欽哉（大分農工銀行頭取：現 みずほ銀行大分支店・別府初の衆議院議員）が浜脇に高級旅館「泉孫」の住宅兼迎賓館建設を欽哉が社長で実質経営者の荒金啓治（後の別府12代市長）の別府製材株式会社に発注。棟梁 平野介治の下で昭和4年（1929）に建築された。

その後、平成元年に青山町に移築された。

道路に面した薬医門（一枚板で造られた観音開き戸は「泉孫」旅館当時の物）潜ると、正面に棧瓦葺入母屋造り平屋建ての重厚な式台と四枚引き違い舞良戸付玄関棟が見える。

主屋は、1階・2階共両脇（東面・西面）に縁側が付く軒先屋根銅板一文字葺と本屋根棧瓦葺入母屋造り2階建ての建物。

1階・2階縁側の下屋根は、片流れ銅板一文字葺で隅棟を持ち建物三方向を巡っている。本屋、縁側下屋共軒裏は化粧垂木・化粧野地板造りで建物全体の屋根は非常に複雑だが優雅な屋根を持つ。

外壁には、油抜きした小径の竹で押さえた化粧杉皮張り仕上げである。

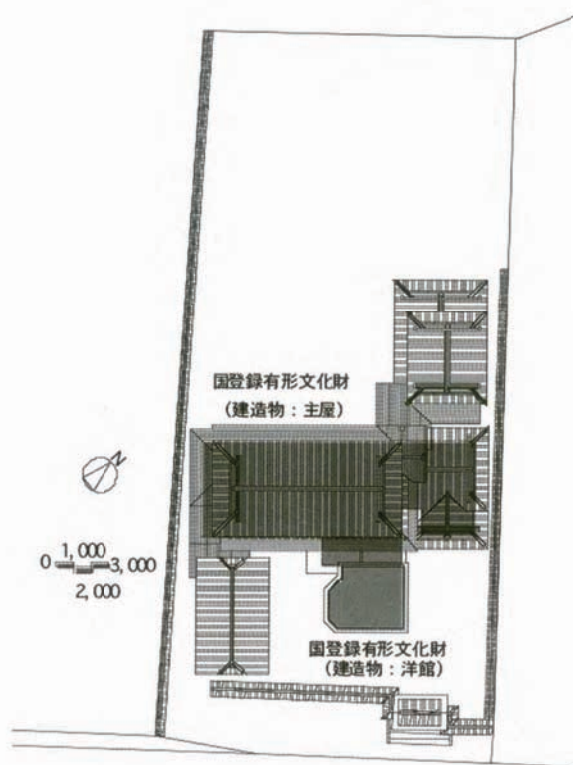
当地に移築したとき、当主が旅館「泉孫」の記憶として「泉」の文字をデザインしたと思われる文様を配した鬼瓦を造った。

この鬼瓦は数種類文様が異なるものがあり、建物周囲を巡り鬼瓦観察してこの建物を楽しむ方法もある。



間取りは、建設当時1階は主人の居間・夫人居間とそれぞれに床の間を持つ10帖和室の独立した室となり両脇の縁側でつながっている。

天井は、1枚が幅広の材を使用し、夫人居間は天井竿縁の方向を通常逆とした珍しい天井







である。

2階も両脇が縁側となった7.5帖・10帖・10帖の三間続きの大広間となっている。

続きの間の場合、間仕切りは通常フスマとランマ・タレ壁で構成されているが、10帖二間大広間はフスマとランマのみで、かつ、ランマは非常に単純化され開放感あふれる大広間である。

正面床の間は、書院・脇床を持つ二間半の本格床の間である。

縁側の長押（フスマや障子の鴨居の上に取り付けられた装飾的な横材）は、西縁側五間（約10m）・東縁側六間半（約13m）の非常に長い物で、継ぎ目無し的一本物を造ろうとすると材料の吟味、運搬方法、加工技術等難問がある。

移築するまでは、東縁側の長押は一本物と信じられていたようだが移築の際1ヶ所継ぎ手があるのが判った。

洋館を含め、材料・職人の技が吟味され洗練された建物である。

現在は、聴潮閣 高橋記念館として色々な企画、催しに使用されている。

## 【 洋館 】

登録対象延べ面積：40.00㎡

外壁は、最上部に曲面付軒蛇腹を巡らせた大壁式モルタル塗吹き付け仕上げの洋館。

間取りは、主屋に接続された約三間半×二間半の矩形に八角形の半分弱が取り付いた様な形状を持つ。



内部は、漆喰塗天井にクロス張り壁・白大理石の暖炉・ステンドグラス等洋風インテリアの造りである。

大きめな縦長の窓に花をデザインしたステンドグラスが二組北面壁にはめ込まれている。

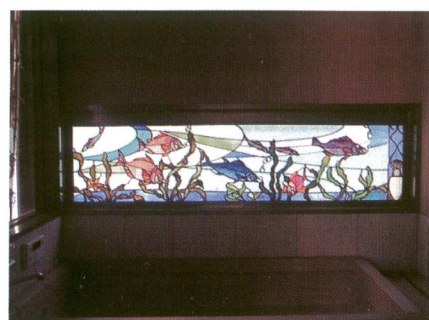
制作者は、日本初のステンドグラス作家「小川三知」である。

別棟離れ浴室にも壁にはめ込まれた海中を模したステンドグラスがある。

イカ・カツオ・キス・ヒトデと海藻、海中の海の色、実に美しい。

このステンドグラスは、旅館「泉孫」の別館男女浴室境壁に2枚組で使用されていた1枚である。

（三ヶ尻 勝）

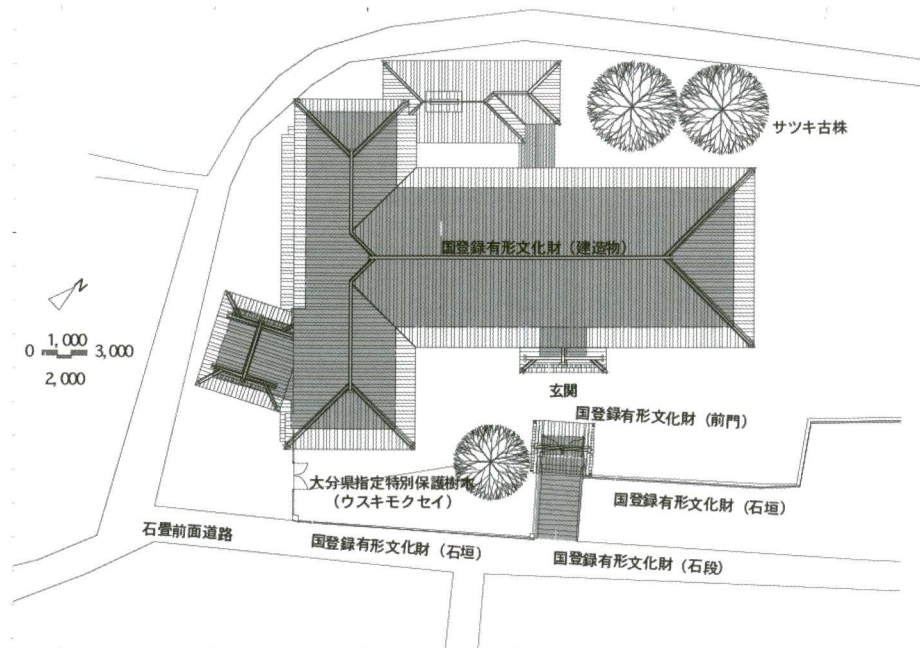


## 2. 富士屋旅館主屋・前門・石段・石垣

鉄輪1組 個人所有

国登録有形文化財（建造物）

平成13年11月20日登録



### 【主屋】

登録対象延べ面積：672.40㎡

明治31年（1898）に建てられた現存では別府最古の温泉旅館である。

当時の別府は、明治33年（1900）5月に浜脇～堀川茶屋（大分市）間に電車が開通（日本で6番目）し、続いて明治44年（1911）7月、博多～別府、亀川駅間に九州鉄道（JR日豊線）が開通。この時期は、観光都市「別府」の黎明期であり、明治39年（1906）4月に鉄輪を含む11村が5村となり別府町として出発した。

主屋は、東側道路と別府湾を正面にT字形に近い平面を持つ寄棟造り・椽瓦葺木造2階建の建物である。



建物のほぼ中央に軒先に反りがある入母屋造り・椽瓦葺平屋建て式台付の風格のある正面玄関が付いている。



現在は、平成16年に改修工事を施し、住民とギャラリー「<sup>はなやもも</sup>一也百」として当時の風格と気品を残し、鉄輪温泉地域の核として活躍し健在である。

特に、ギャラリーとして使用している2階二間続きの和室は当時のままの姿で改修再生されているので、一見の要である。





### 【前門】

登録対象床面積：2.50㎡

石畳敷きの道路より見上げる位置にあり、登録文化財になっている石段の先に一枚板で造られた観音開き戸を持つ、間口一間の棧瓦葺屋根の薬医門である。

主屋との位置関係は、向き合う形になっている。

この薬医門から主屋を正面に見て左手横脇に、推定樹齢200年以上たっている大分県指定特別保護樹木の淡黄白色の花が咲くウスギモクセイがある。

西側庭園にも、同時に移植した数本のサツキの古株もある。



### 【石段】

築造面積：11.00㎡

石畳道路より、前門までの幅2.1m、踏面40cm、厚さ15cmの14段石段である。

側石には15cm角程度の長石を使用している。

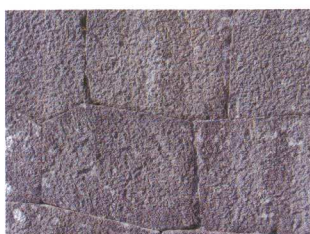
踏石は、長石と短石の2枚で1段を構成され継ぎ目は未だに隙間が無い。

また、ほどほどに表面が摩耗して緩い階段なので登り易い。

### 【石垣】

全長：70.50m

現在は、前面道路は南より北に向い緩い下り坂となり前門の石段部分で高低差約2mあり、その間20m程の長さ、石段側壁部・石段より北側約3m程までの石垣は、石と石との隙間がない亀甲積に近い丁寧な石積擁壁である。



表面は、金槌で叩き小さい凹凸の仕上げ(ピシャン仕上げ)を施している。

また、石段より先3m以上は自然石の乱れ積みとなり、異なる二種類の工法で積まれた総延べ長さ70.5mの石積擁壁である。

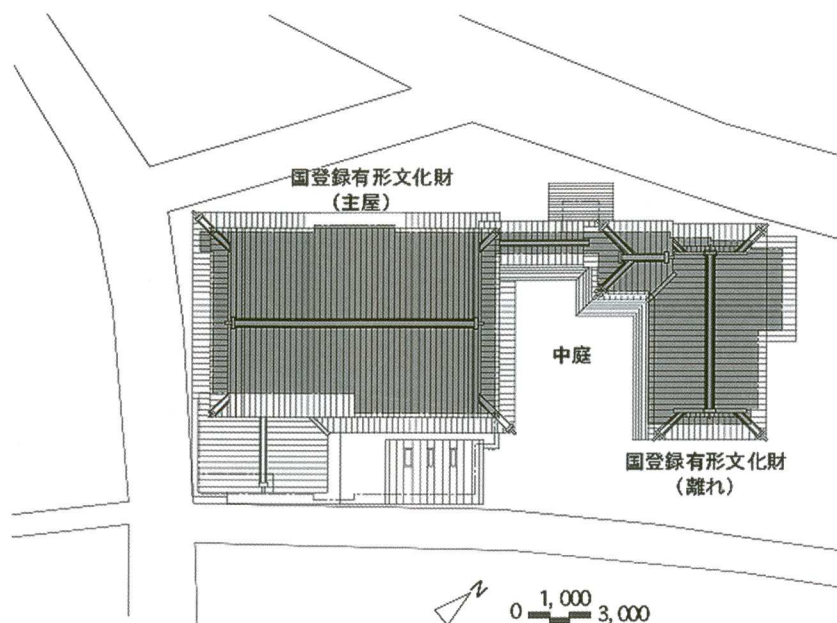
(三ヶ尻 勝)

### 3. 糸永家住宅主屋・離れ

浜脇1丁目11 株式会社 柵屋保全社所有

国登録有形文化財（建造物）

平成19年7月31日登録



#### 【主屋】

登録対象延べ面積：197.85㎡

屋根裏の棟桁に棟札代わりに直接書かれた文字から、明治4年（1871）に6代「糸永又三郎」が隠居した父、5代「孫左衛門（虎蔵）」のために建てられた別荘建築である。

棟梁は「大工 荒金倉吉」の名が棟桁に書かれている。

糸永家はもともと武家であったが、18世紀半ば浜脇に移り住んだ頃から代々庄屋で、明治以降も区長なども務めた家柄である。先祖には、俳人の糸永燕石などがいる。

昭和6年（1931）10代目当主はすでに、この家屋を末永く保全・保存の事を思い「株式会社 柵屋保全社」を設立している。



建設当時は西面道路が主要道路で、棧瓦葺入母屋屋根が道路に面した梁間四間半・桁行八間の2階部分が居蔵造りになっている建物である。

入母屋部分の破風板は、5段の眉で切られた漆喰塗で繊細である。

また、その上には家紋が付いた鬼瓦が乗っている。

正面玄関は道路面に面し、2組の大きな持ち送り腕木で支えられた片流れ屋根を持つ。



玄関屋根の下には、太い格子が小間返しに組み込まれた四枚引き違いの玄関戸、その左手には同じデザインの子持ち連子格子窓、右手は幅半間・高さは玄関戸より巾木分小さいはめ殺し木連れ格子戸で構成されている。

離れを増築した時、8代「岡一郎」がグラフ用紙に作成した平面図を見ると玄関土間脇に中庭へと通じる土間が有りかね折り（直角）で中庭用縁側に通じている。

玄関取次の間（畳敷き3帖の間）には、棟梁が建設記念として杉板で彩色した鯛型板が天井を見上げる形で取り付けられているのが、当時のまま残っている。

現在はギャラリー桝屋として活躍している。



## 【 離れ 】

登録対象延べ面積：63.52㎡

主屋の東側に渡り廊下でつながった、大正初期に8代「岡一郎」が建てた棧瓦葺入母屋平屋建て外壁漆喰塗の数寄屋建築である。

軒裏は主屋と異なり、小舞を組み込んだ磨き丸太化粧垂木・化粧野地板造りであり下屋縁側の内部天井へと続いている。

間取りは、8帖二間続きで本床・天袋、地袋及び書院付の脇床を持つ座敷である。

座敷より縁側を介して、泉水や石造五重塔を持つ中庭の和風庭園が眺められる。

当時植栽された場所とは違っているとの事だが和風庭園に珍しいソテツが現在でも元気に育ち植わっている。

(三ヶ尻 勝)





#### 4. 別府タワー

北浜3-10-2 別府観光開発株式会社

国登録有形文化財（建造物）

平成19年10月2日登録

設計者 早稲田大学教授 工学博士 内藤多仲<sup>たちゅう</sup>

工事施工業者 梅林土木株式会社 （ビル工事）

富士車輛株式会社 （鉄骨工事）

大和工業株式会社 （組立て工事）

富士輸送機工業株式会社（エレベーター工事）

総事業費 2億8千万円

建設年 昭和32年5月10日 完成

昭和32年6月10日 オープンセレモニー

湯の街別府のランドマーク「別府タワー」は、建設から半世紀を迎えた。

昭和31年8月別府観光開発株式会社を設立。初代代表取締役役に元別府市長 故 脇鐵一氏が就任した。

当初、観光国策を助長し、高度の国際的国内観光事業を開発設営する目的で「別府温泉観光博覧会」（昭和32年3月20日から5月20日）に間に合わせる予定であったが、諸般の事情から博覧会閉会後にオープンした。

別府タワーは高さ100m。秒速160mの台風にも耐え得る鉄骨構造。脚間15m、展望台付、下部構造鉄筋コンクリート造り4階建、面積384㎡。

設計は早稲田大学教授工学博士、建築構造学の権威、内藤多仲氏。

名古屋テレビ塔、大阪通天閣に次ぐ、全国で3番目のタワーで、名称は「観光センターテレビ塔」を昭和36年（1961）元旦から「別府タワー」に改称した。

夜の広告ネオンサインは、「サッポロビール」から昭和38年（1963）4月に「ナショナル」に変わり、「朝日ソーラー」平成14年（2002）に、現在の「アサヒビール」にと世相を反映してきた。

#### （参考）

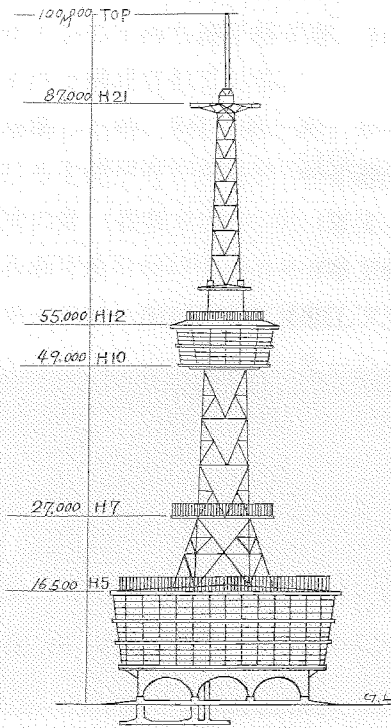
「別府タワー」の周辺は、大正初期、砂湯だった。この北浜海岸に海岸道路（現国道10号）が大正7年に完成すると一帯はにわかに慌ただしくなった。

大正10年（1921）に清水産業（大阪）が北浜海岸を埋め立て分譲した。

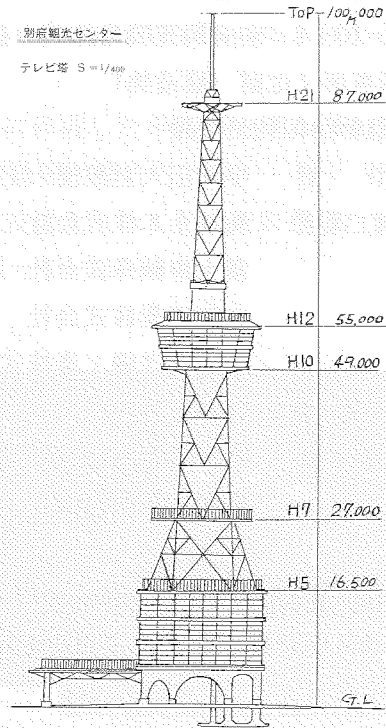
分譲地に旅館やホテルが建設され「北浜ホテル街」として脚光を浴びるようになった。

別府タワーの従前地には、戦後全国民が塗炭の苦しみを味わっている時代キャバレー ナンバーワンがあった。観光客や進駐軍の兵士で賑った場所である。

（外山 健一）



正面略図



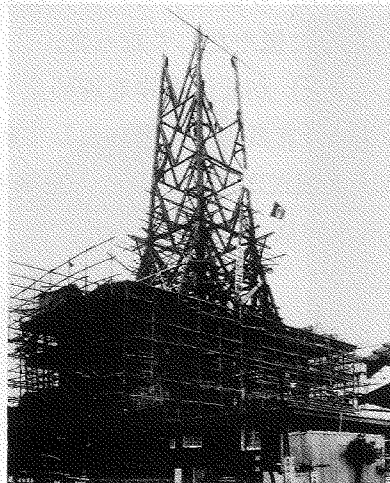
側面略図



キャバレーNo.1 解体工事前



起工式



タワー鉄骨組上げ



## 5. 松下金物店

元町1-22 個人所有

建築年 昭和4年

構造 木造3階建（看板建築）

ファサード（正面外観）はスクラッチタイル張り

設計…平尾 某（東京） 棟梁…平野 平

流川通りにある「松下金物店」は、湯の街の最盛期をしのばせる数少ない商店である。

茶色のスクラッチタイルに白色の煙突。正面から見ると鉄筋コンクリート造り3階建てのように見える。側面から見ると、お面を付けたような寄棟造り棧瓦葺の和風建築なのだ。初代松下才助（故人）は浜脇で金物店を経営していたが、流川通りに進出。このモダンな店舗兼住宅を建設した。

見かけは洋風、中身は和風の簡易洋風建築は大正12年9月1日の関東大震災後に流行したいわゆる「看板建築」と呼ばれ普及した。

店舗内に入ると、2階天井まで吹き抜けで、その中央に開口部を設け、3階まで荷物を巻き上げ機でつり上げられるようになっている。

松の大材を縦横に組み合わせた床組を見上げると、時代がかった木彫の看板が老舗の雰囲気漂わせている。

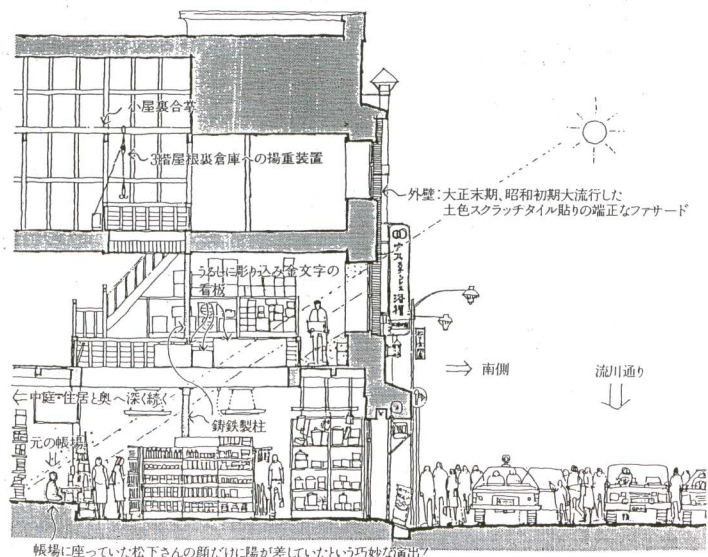
住宅部分は中庭を囲み伝統的な町家の面影を残しながら、倉庫は効率的に格納できるようにした本格的な看板建築が、地元の棟梁の手によって出現したのである。

建設当時より金物店として使用されている。別府ではほとんど残されていない商業関係の近代的建造物である。現在も当時のまま使用されている。

（外山 健一）



外観



吹抜け廻り断面図

（『月刊アドバンス大分』1984年8月号 作図：山口 隆史）

## 6. ラクテンチ（ケーブルカーの道床）

乙原1組 株式会社岡本製作所

建設年 大正14年6月起工

昭和4年8月2日竣工

昭和4年9月3日開業

構造 コンクリート造り 一部石造

7連のアーチ橋

傾斜角度29度12分

総事業費 約15万円

そもそも「ラクテンチ」は、鳥取県の境出身の「日本の産金王」と呼ばれた木村久太郎氏が、別府市霊泉寺（現原町15 温泉プール跡地）に事務所を置き、明治36年7月16日株式会社木村商事を創業し「木村金山」として金の採掘をしたのに始まる。

乙原台地の中腹一帯約30haを鉱区とし、竪坑、斜坑、横坑等10ヶ所程度掘削したが、地熱にさらされ、苦勞の末、乙原水路の冷水を坑内に流入し、温度低下を試みたが、地熱の障害には勝てず、大正5年9月に操業を休止。木村はこの金山を諦めきれず、大正12年に採鉱技師 山崎権市を派遣して再開を図ったが、温泉脈の影響を理由に、ついに大正13年に閉山となった。

因みに、明治36年から大正13年までに金38貫259匁、銀68貫562匁を産出したといわれている。木村は、泉都別府が天然の景勝の地に富むに拘らず、人工的な娯楽施設の欠如を見て乙原の近くに遊園地の計画を立て、総事業費15万円の巨費を投じ、大正14年6月に起工、昭和4年8月2日竣工、同年9月3日「別府遊園」として開業した。

ケーブルカーは、全長253m、軌道面の傾斜角度は29度12分の急勾配で、急勾配と延長の短い点では日本一である。

この勾配に、つるべ式の客車を上下駅から同時に発車させ、途中で離合させる技術を、スイスから導入した。

同国のギゼラインベルン社のE・リーゼン技師が来別して指導にあたった。

近代的なレジャー施設として、当時の面影は軌道下のコンクリート造り一部石造の7連のアーチ橋や上駅の展望台は今も残っている。近代的観光文化施設の先駆けとなる。

ケーブルカーの運行は日本で4番目である。

- |                |               |
|----------------|---------------|
| 1. 奈良県生駒鋼策鉄道   | 大正 7年 8月29日開業 |
| 2. 小田原電気鉄道     | 大正10年12月 1日開業 |
| 3. 信貴生駒電鉄      | 大正11年 5月16日開業 |
| 4. 別府遊園（ラクテンチ） | 昭和 4年 9月 3日開業 |



( 経緯 )

大正15年 2月20日	鉄道省の鉄道敷設の免許を受ける。
昭和 4年 8月 2日	ケーブルカー竣工。
昭和 4年 8月28日	鉄道省のケーブルカー運行の認可を受ける。
昭和 4年 9月 3日	ケーブルカー「開通式」(現地) 同日午後、別府市公会堂に知名士500余人を招待し「開業式」を挙げる。
	〈 ケーブルカー運賃 〉
	大人(往復) 30銭
	大人(片道) 20銭
	子供 半額
昭和 4年 9月21日	戸川熊本逓信局長から逓信省の認可を得ていないことを指摘され一時 休止となる。
昭和 4年 9月25日	逓信省の認可を受ける。
昭和10年	「別府遊園」を「別府ケーブルラクテンチ」に名称変更。
昭和29年	株式会社別府国際観光に譲渡。
平成15年11月 1日	株式会社岡本製作所に譲渡。
平成16年 3月	「別府ワンダーラクテンチ」に名称変更。
平成21年 7月18日	名称を「ラクテンチ」に戻して営業。

(外山 健一)



ケーブルカーの道床



ケーブルカー

## その他

### ◎ 実相寺竪穴住居復元家屋（春木5-2）

発掘調査 昭和28年

古代住居復元 昭和51年3月3日完成

実相寺竪穴住居遺跡は、昭和28年国際観光道路（道路幅員20m）の築造工事の際に発見された。（添付図面参照）

現在の復元家屋の東約100mのところにあたる。

発掘調査の状況は、「別府市実相寺遺跡報告（写）」の通りである。

実相寺竪穴住居復元の声は昭和32年当時から出ており、別府市文化財調査員会でも過去10数年間、集まるごとに取り上げ、何回か当時の市長はじめ関係方面へ陳情したが実現に至らなかった。

脇屋長可市長が就任するや、昭和50年度に住居跡復元の予算を計上し、昭和51年3月3日に茅葺家屋（竪穴式住居1棟、平地式住居1棟）2棟を完成した。

その後、平成4年、平成6年3月15日、平成20年3月28日復元家屋の補修を行ってきた。

復元家屋の内容は、いくつかの弥生時代の住居跡のうち、ひとつの竪穴住居の柱穴をもとに復元されている。

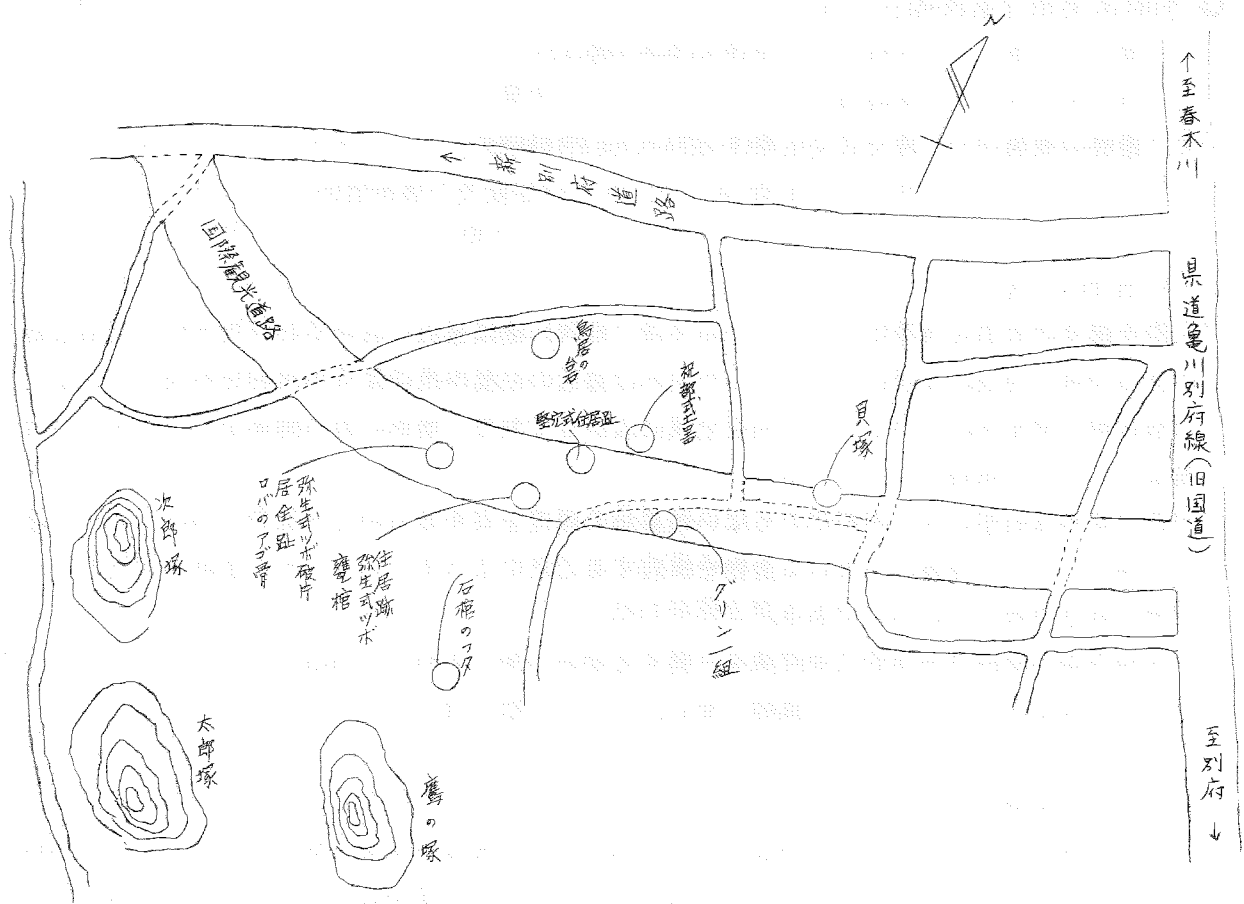
広さは4×4.5mで、夫婦単位の住居であったと考えられている。

また、このあたりには「実相寺遺跡」とよばれ、有名な佐賀県の吉野ヶ里遺跡のような大規模なものではないが、別府の古代の暮らしを知る上で別府市内では数少ない貴重な遺跡である。

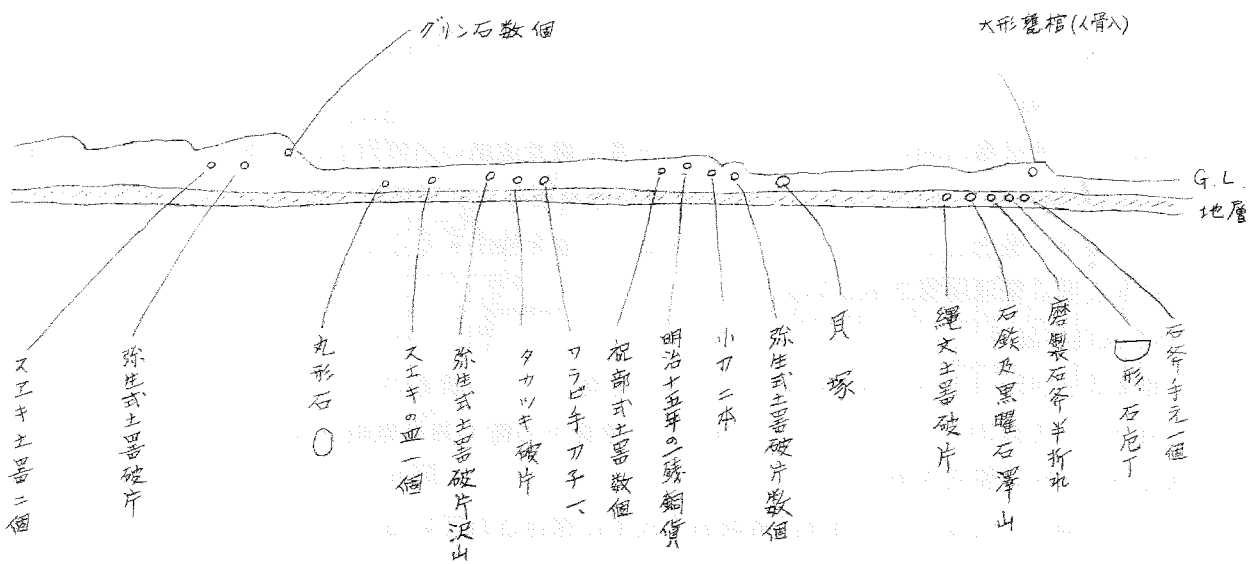
（外山 健一）







別府市実相寺遺跡発掘平面図



別府市実相寺遺跡発掘断面略図

## ◎ 別府市実相寺遺跡報告（写）

1. 地 番 別府市北石垣春木(春木5組の2)
2. 所 有 者 別府市
3. 遺跡の種類 縄文式文化期(石器時代)後期住居跡  
弥生式文化期(金石併用時代)住居跡及び甕棺遺跡

### (一) 地理的位置

由布鶴見の火山を背後にしたいわゆる沖積（扇状）地は過去においておびただしい火山活動による沖積と地殻の隆起により若返った地形は最近の氾濫作用により小河谷を形成しているこの扇状地は実相寺山を中心に広く別府全域に広がっており、地形の若い関係がこの地を扇山山麓よりかなりの傾斜をなしている。

この傾斜は前述の火山作用にともない幾重かの層位を有するもので、過去における文化の存する場合にはこの地層に含まれる遺物を検討することによって、いくつかの遺跡の状況とりわけその終息が考えられるのである。

実相寺森山遺跡は地理的に別府湾を一望する絶好の地を占めると同時に、その文化層も火山その他の堆積によってかなり繊細に検討出来得る特徴を有している。

### (二) 発見の動機

実相寺春木附近はいわゆる国際観光道路の開発により数年来土木工事が実施されてきたが昭和28年の始め、春木川に沿う新道が別府亀川の旧国道を貫き新別府に到る工事に際しおびただしい縄文式土器、弥生式土器片が散乱されむなしく遺跡遺物が破壊されるに到ったのである。

この際、この工事附近に在住の鈴木栄氏（別府変電所長）によってこの遺物が注意され、氏によってこの遺物の鑑定を別府女子大学上代文化研究所に依頼して来た。すなわち同研究所では直ちに現地の調査にのり出し工事の進行により次々と破壊されるものに対し綿密な検討を加えてきたのであるが、主として連日工事場において遺物の採集にあたった鈴木氏の努力により次第にその全容が明らかにされたのである。

### (三) 遺跡

#### 【 縄文式住居跡 】

遺跡は、別府亀川間の国道すなわちこれを貫く観光道路の右側附近に、縄文式文化の住居跡（竪穴式住居）を工事中に確認したが、工事が急を要したので精密な調査の出来なかったのは残念である。遺物としてはおびただしい土器、石器を検出することが出来てそれ等はすべて前記鈴木氏宅に整理保管されている。

#### 【 弥生式住居跡 】

縄文式住居跡の上方（西方）において層位を異にして（前者の上層）道路工事の中央附近に円型プランを露出したが、これも工事中にて精査不可能であり概略直径約5mの円形（方形に隅丸のもの）の竪穴であった。

そして縄文式同様、その遺物は多数鈴木氏宅に保存されている。



## 【 甕棺墳墓 】

弥生式住居趾に近接しておびただしい土器が発見された。

この地点における大部分のものは甕棺であることが判明した。

この甕棺は弥生式後期のものでその源流は北九州に発達したもので、西暦紀元を前後する時期に発生を見たものである。

春木附近の甕棺は合口<sup>あわせぐち</sup>（2つの甕を合せその中に死体を入れる）によるもので、形の上から小児甕棺と思われる。

なおこの甕棺墓は群集していることが普通であるため、今後の調査が可能であるとすれば相当の成果が期待出来るのである。

## (四) 考察

以上の遺跡は層位的に時代を異にし性質を異にするもので興味深いのが、特に縄文式時代後期の住居趾が発見されたことは本県では稀有なことである。

なお、この住居趾から発見された縄文式土器は後期を標式するもので貴重な資料である。

また、弥生式の住居趾と墳墓などは、ようやく発生しようとする日本古代の部落趾とその協同体とを検討するのに充分の資料と考える。

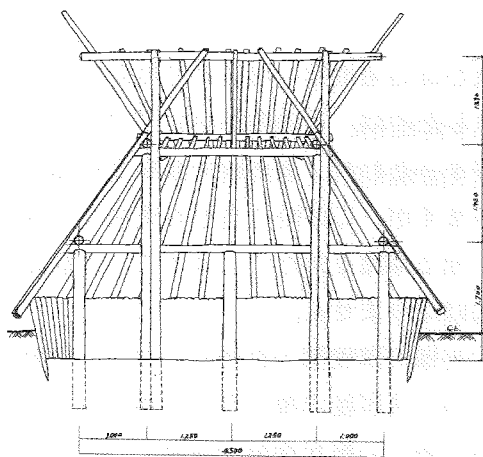
いずれにしても、土木工事中のあわたたしい調査であったため精密な検討を加えるには不十分な点が多かった事を遺憾とする。

## (五) 遺跡の保存

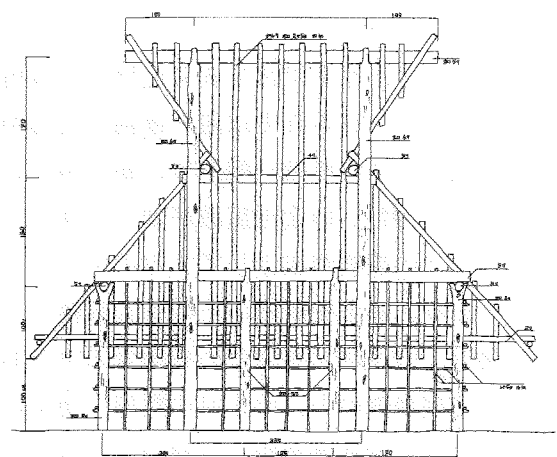
この風光に富んだ別府市の観光の中心に位置する場所に、われわれの祖先のなしてきた由来を物語る貴重な資料を発見したことはまことに意味が深い。

国際観光都市、別府の由来を語る上にこの遺跡を復元保存することが必要で、そのためには一応文化財保護法により遺跡の学術調査を行い、屋外博物館的な方法で、永久保存顕彰に努力すべきである。

以上



竪穴式住居断面図



平地式住居断面図

## ◎ 別府市北石垣春木遺跡発見に就いて

実相寺町 九電社宅

鈴木 栄

別府市には、日本の国史上のいわゆる上代と言う時代の中期以前は、人の居住はなかったものと一般的にも歴史家にも考えられていたのですが、今回国際観光道路建設工事中その現場から沢山な出土品が発掘されて新しい話題を生み出した工事現場は鶴見山麓から海岸に至る約4kmの一定斜面の内の、北石垣<sup>てんじんばたぎょうぶ</sup>天神畑行部春木地域の旧国道を北西に曲った巾20mの地点であります。

天神畑は火男火売神社の御旅所と伝えられていますが今回同所から鳥居の礎石2個が発見されて確認されるに至りました。

さて、右の現場からは、縄文式文化時代の末期と思われる土器、これは西平式土器〔熊本県〕発見者の氏名かのモールス(?)土器と言う。

推定今より3000年前後の物が沢山出土しました。

なお、その附近に住居跡も発見され、その包含層より黒曜石の破片ならびに石器が相当数検出することが出来ました。

こうして調査研究をしている内に、工事も日毎に進展して、今度は日本歴史のいわゆる上代の中期の頃、今より約2200年前の崇神天皇及び垂仁天皇以降のいわゆる弥生式文化時代の土穴式住居跡数ヶ所と、弥生式土器多数が出土致しました。

また、弥生式文化時代の中期の頃から、別な型式である祝部式土器、土師式土器、続いて瓦器、初期の頃と思われる陶磁器等種々雑多な型式のものも続々と発掘されました。

この地方は古墳文化時代の遺跡として、すでに世人に知られた所で、鬼ノ岩屋と称する巨大な横穴式古墳が2基、それから太郎次郎の塚、鷹の塚等が散在していて、由緒の深い地域であります。

仏教文化の施設としても実相寺(実相寺山麓)円通寺(女子大附近)古寺(春木川の橋を上る)等、その外市内各所に地名や部落名として残っていますが、石垣原の合戦を最後として壊滅しているようであります。

別府には、今まで弥生式文化時代の遺物は南石垣及び北石垣地域一円によく見受けられるのでありますが、日本有史以前の遺物や遺跡が発見されましたのは、この度が始めてであります。

終戦後、別府市は一躍世界の観光地として天恵の美をうたわれ、また観光温泉文化都市としての名にふさわしい文化施設が着々と進められつつありますが、この時に当り有史前より数千年間の各時代の遺物が出土して太古の生活文化をうかがい知る端緒を得たことはまことに意義深いことであり、郷土史研究の上の一大収穫であると申さねばなりません。

最近、市長さんをはじめ有識者の方々および地元の皆様の御理解と御援助によって現地を学術的に発掘調査の上、出土品の整理、甕棺古墳、石棺古墳、住居跡の復元等が計画されて我が国では珍しい「屋外博物館」の建設が目論まれつつある事は新しい観光資源の開発として、また観光都市の文化施設として裨益する所大なるものと存じます。

昭和29年3月21日

以上



## 資料以外の参考文献

- \* 藤 森 照 信 (2003) : 歴史遺産日本の洋館 第5巻
- \* 聴潮閣ホームページ
- \* 堀 藤吉郎、志多摩 一夫 (1968) : 目で見る別府百年
- \* 文化庁ホームページ : 国指定文化財等データベース
- \* 大分県庁ホームページ : 特別保護樹木一覧
- \* 村 田 政 弘 (2008) : 乙原の今昔
- \* 檀 上 栄 (1982) : 今日新聞
- \* 別 府 史 談 会 (2009) : 別府の古い道歴史散歩
- \* 村 松 幸 彦 (1992) : ふるさとガイド
- \* 村 松 幸 彦 (1993) : ふるさとガイド
- \* 別府市教育委員会 (1994) : ベっぷの文化財
- \* 別府市教育委員会 (2009) : 別府市の文化財と保護樹
- \* 脇 鐵 一 (1964) : ある市長のノート
- \* 別府市教育委員会 (1954) : 別府市実相寺遺跡報告
- \* 別府観光開発(株) (1956) : 株式発行目論見書
- \* 永 尾 和 夫 (1992) : 西日本新聞
- \* 別府観光開発(株) (1957) : 開館記念の栞
- \* 別府観光産業経済研究会 (1993) : 別府近代建築史
- \* 大分県教育委員会 (1993) : 大分県近代化遺産一覧

## 執 筆 者

- 執筆 文化財調査員 (地域近代史) 外山 健一
- 執筆 文化財調査員 (近代建築) 三ヶ尻 勝

別府市文化財調査報告書

別府市文化財調査報告書 No.41

発行・編集 平成23年3月31日  
別府市教育庁生涯学習課

編 集 別府市教育委員会  
別府市文化財調査員

印 刷 株式会社プリメディア

べっふの文化財 No.41

発行・編集 平成23年3月31日  
別府市教育庁生涯学習課

編 集 別府市教育委員会  
別府市文化財調査員

印 刷 株式会社プリメディア